

初めての絵本

吉田 千枝

はじめまして、こんにちは。私は、2才の息子（有杜くゆうとく）を持つ母親です。

先日初めて有杜に絵本を買ってあげました。新聞の隅にオススメ絵本として紹介されていたのを見て、「これだ!」と思い本屋へ走りました。電車好きの有杜だからきっとこれなら興味があるだろう。くせんろはつづくという絵本です。

絵はどこか懐かしさを感じるような優しい印象。初めて与える絵本だから柔かな優しい絵で、有杜にとって難しい言葉が使われていない分かりやすい内容のものを探していました。それがやっと見つかったのです。

親子でワクワクしながら寄り添ってページをめくりま

す。そこには有杜のお友達みたいな子供達がみんなで線路作りをしています。すると、

「やまがあった。どうする?」

「かわがあった。どうする?」

線路を作る途中でさまざまな困難があり、線路をつなげることができず子供達が困ってしまいます。しかしそれに対し、

「あなをほろう。トンネルだ」

「はしをかけよう。てっきょうだ」

というように次のページには解決策。そしてついに線路がつながり、駅もしっかり作って電車を走らせます。みんなが嬉しそうに手をふって電車に乗っています。

有杜の様子をチラッと見ると、有杜もまるでみんなと一緒に線路作りをしたかのように喜ぶのです。最後には有杜も笑顔で絵本のみんなにおかって手をふります。私

は驚きました。実は有杜、毎日のように家でおもちゃの

なっていたのです。

線路をつなげ電車を走らせて遊んでいます。まだ自分で線路をうまくつなげられないので私が作ってあげるのですが、線路が出来上がっても喜ぶことすらせず、当たり前かのように待っているだけ。しかし、この絵本の中で線路が出来上がった瞬間に目を輝かせながら喜ぶ有杜の姿。私はしばらく考えてしまいましたね。そして育児につながら大切なことをひとつ学んだような気がします。

何も知らない純粋な子供。なんでも「あって当たり前」

ではなく、その過程を教えたり、一緒に考えてあげることでが大事なんだ。そうすることにより物の大切さや喜びが生まれるものなんだと気付いたのです。

きっと有杜は絵本の世界に入り込み、さまざまな困難を乗り越えた喜び、そして仲間と一緒に線路を作りあげた喜び、それらを覚えたのでしょう。線路作りの一員に

それからもうひとつ、この絵本を通じて嬉しく思ったこともありました。それは、有杜とこんなに会話をじっくりできたこと。毎日家事育児に追われ、ゆっくり有杜と向き合って会話をしていなかったかもしれないあ、と…。この絵本は問いかけ型なので、言葉のキャッチボールをしつつページをめくっていくのです。また、会話をすることにより言葉も一気に覚えました。絵本によって親子の絆や本人の成長を感じることができた時間でした。この絵本だからこそだと思っています。

今まで本を見つけると破いてしまったり粗末に扱う有杜でしたが、この絵本は大切に持ち歩いているのです。親子で大切な事を学んだ初めての絵本、それが我が家はくせんろはつづくでした。私は今後、子供がいる家庭へのお土産やプレゼントにはこの品を候補にするかもし

れません。同じ思いをしてもらうために…。

【柳田邦男さんからのメッセージ】

2歳の息子さん（有杜君^{めいと}）に、『せんろはつづく』という絵本を買って、読み聞かせをして、気づいたことを、実際にドラマティックに書いています。

それは、子どもの心を育てる上で、とても重要なことです。有杜君は、おもちゃの電車で遊ぶのが好きですが、自分で線路をつなげられないので、お母さんが作ってあげる。しかし、有杜君は、そのことをあたりまえのように待つだけで、喜びの表情も見せない。

ところが、絵本で読み聞かせをすると、山があったり、川があったりで、その都度、トンネルを掘ったり、鉄橋をかけたりして、線路を作っていく。有杜君もその線路作りに参加したかのように喜びの表情を浮かべ、最後にでき上がると、

絵本のみんなに、手をふることで済んだという。

吉田さんはこう書きます。「なんでも”あって当たり前”ではなく、その過程を教えたり、一緒に考えてあげることが大事なんだ。そうすることにより、物の大切さや喜びが生まれるものなんだと気付いたのです。」

子どもを育てるのは、一日一日がドラマですね。そして、子どもを育てながら、大人（親）もいろんなことに気づいて育つのです。そのみごとなしポートでもある吉田さんの「初めての絵本」を、文旬なしに大賞に選びました。